

Cousin Phillis: 変革する女性の運命

朝川 真紀

1. はじめに

『いとこフィリス』(*Cousin Phillis*)は1863年11月から1864年2月まで『コーンヒル誌』(*The Cornhill*)に掲載された。それまではチャールズ・ディケンズの編集する『オール・ザ・イヤー・ラウンド誌』(*All the Year Round*)と契約をして週刊で作品を連載していたが、最後の二作品『いとこフィリス』と『妻たちと娘たち』(*Wives and Daughters*)は、友人ジョージ・スミスの出版する『コーンヒル誌』に月刊で載せることになった。こちらの方が、じっくりと深く観察をして、詳細に記述をすることができ、ゆっくりとした展開のギaskell小説には好ましいものであった。この小説は、当時の標準的長さの三巻本に対し、『コーンヒル誌』四回分の連載であり、一卷本の長さであった。

これらの最後の作品を書いた時期、ギaskellは家から離れ、フランスやイタリア、ドイツでしだいに長期間過ごすようになっていた。マンチェスターやイングランドの外を見ることで、世慣れる機会もたくさんあり、歴史の変化を深く意識していた。複雑に入り組んだ本作品を、フィリスの心の変化、変革するヴィクトリア時代の女性、現代性から考察してみたい。

2. 主人公の心理的变化

この作品の設定はナッツフォード (Knutsford)、ここではエルタム (Eltham) と呼ばれている場所である。ホープ・ファーム (Hope Farm) はギaskellの祖父サミュエル・ホーランド (Samuel Holland)、そして母の所有する家であり、ギaskellが長年親しんだ家がモデルとなっていたと言われている。また、ホープ・ファームの所有者ホールマン氏 (Holman) は、牧師を辞めたあと農業に没頭したギaskellの父、ウィリアム・スティーヴンソン (William Stevenson) にとても似ている。ウィリアムはユニテリアン牧師であり、知的能力と深い宗教心のある良識を持ちあわせた人物であり、ホールマン氏も牧師であると同時に、農業に従事する、人間の脈が激しく打ってい

18 *Cousin Phillis*: 変革する女性の運命

る人物として描かれている。ギaskellは青春の記憶をたどり、自分の心と信仰の根源を再訪している。過去と触れ合うことでよみがえる郷愁によって、この作品は、『クランフォード』(*Cranford*)を思い起こさせるような牧歌的な雰囲気漂う世界を醸し出している。

この作品について Arthur Pollard は、

Setting is lovingly and attractively drawn, characters are exact even down to the farm-labourers who make but two or three appearances, plot is scanty yet sufficient, tone is perfectly modulated throughout, the author's own attitude is generous and kindly without any hint of deliberate moralizing. The whole work has about it the perfection of a delicate piece of china, but it has also abundant human warmth. . . . It shows that here too, as in her novels, Mrs Gaskell appeared to have become endowed with new energy and new vision in her last years. (Pollard 192 — 193)

と述べている。また、Edgar Wright は、

The Cranford generation is still to be seen, admirable worthy of respect and love, but old-fashioned and slightly absurd. There are very few outstanding novelists whose final work can be confidently claimed as the best, fewer whose final novels are as fresh, and younger, than the early ones. (Wright 195)

と評価している。牧歌的なセッティングではあるが、ギaskellの人生に対する洞察は『クランフォード』のときよりいっそう深まり、きめ細かな人物の描写が展開される。

作品のストーリーは単純であり、ひとつの家族に焦点を当て、ポール・マニング (Paul Manning) が青春の記憶を振り返りながら語っていく形で進んでいく。主人公 Phillis Holman (フィリス・ホールマン) の話は、恋愛を通し、自意識に辿りつくまでの、ゆっくりとした内面の転換、成長の軌道を映し出している。フィリスの喜びと苦悩が、ポールを通して間接的に眺められている。

ナレーターであるポール・マニングは、小さな田舎町近くで、鉄道の支線をかける見習いエンジニアとして、初めて親元を離れ、一人下宿住まいを始

めた若者である。1年後、新たな支線の仕事で田舎へ行き、遠い親戚にあたる農場主兼牧師のホールマン氏を訪ねて ホープ・ファームへ行き、そこで従妹のフィリスと出会う。言葉以上の一瞥の凝視がこの話の表現方法であり、ポールの回想は絵のように浮かび上がってくる。17歳のフィリスは、“She was a stately, gracious young woman, in the dress and with the simplicity of a child.” (11) とあるように、女性の魅力というより、子供じみたエプロンをした純粹無垢の女の子であった。

最初、臆病な少年は、背の高いフィリスに対して見かけと同じくらい心の内に惹かれるが、彼女の知識の豊かさに対する畏敬の念で委縮し、ロマンティックな希望を捨てるのであった。彼女は手と同じくらい頭を使うことを熱望し、リンゴをむきながら、そばにあるドレッサーの上の本に何度も頭を向けるシーンは、まるでホープ・ファームのエデンに、知識のりんごを求めるイヴがいるかのようである。ホールマン家のゆっくりとした生活の中に、新たな訪問者、ポールの英雄であり、上司のホールズワース氏 (Holdsworth) が入ってくる。彼は病氣療養のために訪れるのであるが、フィリスのイタリア語の読解を助けるだけでなく、彼女の心に変化を与えるのであった。フィリスは彼の資質に惹かれて心をときめかせる。

ホールズワースはクールな女たらしではなく、無頓着なところもあるが敏感な男であり、ハンサムで旅慣れていて教養もあった。彼は、外国風な髪形をして、南部の母音をのばした怠惰で場違いな陽気さを持って、ホールマン家の人たちとは異なった話し方をする。真面目な牧師一家は時々彼の言葉についていけない。しかし彼の話はとても魅力的で引き込まれるものであった。フィリスにとってまるで違う天体の香気を漂わせたホールズワースは魅惑的で夢見心地にさせるようだった。ホールズワースは彼女の父と同じくロマンティックで、女性に対して幻想を抱いているためフィリスをはっきり見ていないところがあるが、彼も美しく知的なフィリスに魅了されるのであった。

二人の友情はゆっくり熟してくるが、約束の言葉を交わすわけでもなく、夏のどしゃぶりの中、彼の上着でフィリスは首と肩をくるまれる以外、触れることもない。しかしこのときフィリスは、性的な目覚めを呼び起こされ、雨宿りの場所に駆けてきた彼女の眼は、喜びに輝き、顔色は健康そうにさえざえとしていた。一方ホールズワース氏は彼女を、小麦の穂を頭につけた、農業と多産の女神ケレスのようにスケッチする。甘美で無邪気な顔をした未完成のフィリスの絵は、陰影や色をつけられることはなかったとポールが述

20 *Cousin Phillis*: 変革する女性の運命

べるように、ホールズワースは生きている女性でなく、無垢のイメージを愛している。

しかし、フィリスが口には出せない愛の喜びと苦しみを募らせる最中、ホールズワースは突然仕事でカナダに行くことになるのであった。

God keep her in her high tranquility, her pure innocence. Two years! It is a long time. But she lives in such seclusion, almost like the sleeping beauty, Paul” (he was smiling now, though a minute before I had thought him on the verge of tears) “but I shall come back like a prince from Canada, and waken her to my love. I can’t help hoping that it won’t be difficult, eh, Paul?” (64)

彼女が目を覚ましていないと思い、罪もなく行ってしまうが、フィリスはすでに目を覚ましている。彼女は眠れる森の美女でもケレスでもない。束縛の中の悲痛な思いは、人生を突然の虚しさ、消滅へと向かわせるのであった。

年の変わり目のクリスマスに、ポールは萎えた従妹を元気づかせるために、ホールズワースがフィリスと結婚するためにいつか戻ってくるつもりだと自分に打ち明けたと告げた。フィリスは生き返り、そしてしばらく幸せだったが、ホールズワースがフィリスに似たフランス系カナダ人のリュシーユ・ヴァンタドゥール (Lucille Ventadour) と結婚したという知らせが届く。虚しく心を弾ませていたフィリスにとって、この二度目の打撃はあまりに大きく、夢は枯れ、無気力になる。彼女の沈黙の苦痛はあまりにも人間的で、恥ずかしさや空虚さが入り混じっている。次の文章、“She must have been half undressed; but she had covered herself with a dark winter cloak, which fell in long folds to her white, naked, noiseless feet. Her face was strangely pale: her eyes heavy in the black circles round them.” (99) は、彼女の苦悩と性的な愛の屈辱を強調している。

脳炎で死の淵をさまようフィリスは、回復後、かつて望んだリボンを買っても、母がラテン語やイタリア語の本を見つけてきても、無関心で記憶がはっきりしない。理想郷の日の当たる庭は、悲しみと死の影に脅かされる。しかし、フィリスを取り巻くあらゆる善意、優しさ、気遣いが、やがて調和した静かな流れを運び、フィリスは回復の兆しを見せる。ポールに、バーミンガムの彼の両親を訪ねてよいかとフィリスは聞き、牧歌的世界から現実に

足を踏み入れようとする。‘Only for a short time, Paul. Then we will go back to the peace of the old days. I know we shall; I can, and I will!’ (109) フィリスは自分の意思のほかには頼るものがないとわかったとき大きな決意をする。彼女は変わった。彼女のかすかなためらいには悲哀がこもり、本当の昔の平和には戻れないことを理解した。古い流儀がもはや彼女に十分でないという自意識が生まれ、肉体的にではなく、精神的にエデンから追放されたのである。

3. ヴィクトリア時代の女性

牧歌的「自然」は必ず女性で、神のもとで、それを支配するのは男性である。ヴィクトリア時代、女性の生活は、どんなに独立心が強くても、父、恋人、夫によって制限された。ほとんどの女性は献身的に家庭を愛する「家庭の天使」のままであった。純粋さは美しさであり、家庭の外では行動できず、考えるのは家庭のことだけ、性的覚醒もない、というのがヴィクトリア女性のイメージとなっている。

ヴィクトリア時代の女性について Suzanne Fagence Cooper の *The Victorian Woman* では次のように書かれている。

... the husband should go out into the world to earn enough to keep his wife at home, and she should be occupied with providing a cheerful domestic environment. In the model relationship, each partner had their own responsibility, and the wife's duties educating the children , managing the household and providing emotional support for her husband were not undervalued. However, the husband maintained his position as the head of the family. (10)

また、ヴィクトリア時代の女性が、法律によっても男性とは異なり劣っているとみなされていた点について、

Many girls of the upper and middle classes found that their freedom was severely reduced once they married. Their legal position was not necessarily improved as, until 1870, all goods and funds belonging to a wife automatically passed to her husband upon marriage. During the later Victorian

22 *Cousin Phillis*: 変革する女性の運命

period a series of Acts of Parliament enabled women to take control of their own property. In 1870 it was agreed that a married woman could retain £ 200 of her own earnings, and in 1882 a new Act allowed married women to own and administer property. (20)

と書かれている。

この作品においても、ヒースブリッジの少年が競争でかけっこをしてミルクをこぼしたとき、‘Then you’d not be boys; you’d be angels.’ (17) と言って牧師は彼らを安心させるシーンがあるが、男はかけっこをして、競争する勇敢さを持ち、肉体的、知的、社会的な活動ができる。このストーリーの男たちはみんな愛する能力を持っているが、何も悪意なしに仕事を優先させている。ジョン・マニングは、フィリスがラテン語・ギリシャ語を身につけていることが女性らしくないことで、一時のものにすぎないと考えている。彼は “She’d forget ’em, if she’d a houseful of children,” (37) と言う。ホールマン牧師は、フィリスが古典や機械に関心を持つことを鼓舞するが、リボンを欲しがることには同意を渋る。外面的なことより内面を誇れるようにすることを優先しているものの、彼女のアイデンティティーを別の方法で否定する。古いピューリタンの父は、親として独占欲が強く、良識ある女性は、目覚めさせられるまで性的衝動があってはいけないと信じる、典型的ヴィクトリア人である。

ヴィクトリア時代の女性についての問題の一つは、娘に対する父の権限によって引き起こされている。“A Dark Night’s Work”のエリノアもフィリスも、父を盲目的に信頼し賞賛しているが、ポールは娘の悲嘆の原因を探る彼女の父を見て、盲目的な愛の深さを知る。

I could not help remembering the pinafore, the childish garment which Phillis wore so long, as if her parents were unaware of her progress towards womanhood. Just in the same way the minister spoke and thought of her now, as a child, whose innocent peace I had spoiled by vain and foolish talk. (98)

娘フィリスとホールズワースとの恋愛を不埒なことだと考えるホールマンの嘆きは、嫉妬深い恋人のようなものであり、父は娘を自分の一部として

考え、一人の人間として見ていない。フィリスは、父の所有物である子供でいるか、それとも自分自身を選択する女性でいるか、まるで二つに引き裂かれるかのように、精神を錯乱させた。古い理想が新しい理想とぶつかり、対立する忠誠心の問題と戦ったのである。そして彼女は “I loved him, father!” (99) と声を上げたのだった。Aina Rubenius は、

Mrs. Gaskell had no patience with the “womanly”, simpering creatures with a habit of fainting in all exciting or difficult situations, who usually figured as heroines in the novels of sentimentality. Mrs. Gaskell’s heroines hardly ever faint in order to escape a difficulty. If they faint at all they generally do so after they have grappled with a situation and weathered the crisis. And they do not sink down in a graceful swoon to evoke the protective chivalry of the hero. (17-18)

と指摘するが、フィリスはポールが父から責められるのを守るために、また自分の気持ちに偽ることなく、ホールズワースを愛していたと、ありのままの心の内を吐露したとき、自立した責任ある新たな女性の概念が具体化されている。

Linda K. Hughes は “Phillis Hollman, like Elizabeth Gaskell herself, is more than the typical Victorian woman in this fine story.” (*Victorian Publishing and Mrs. Gaskell’s Work* 161) と述べているが、女性の立場の議論に対するギaskellの態度はどうかというと、ギaskellは、1856年10月の手紙で次のように書いている。

I would not trust a mouse to a woman if a man’s judgment was to be had. Women have no judgment. They’ve tact, and sensitiveness and genius, and hundreds of fine and lovely qualities, but are at best angelic geese as to matter requiring serious and long scientific consideration. (Chapple 419)

判断力の不足は女性の最もよくある欠点の一つであり、能力よりも識別においてその劣性があることを認めている。しかしギaskellは自分の娘たちに、集団的な思考や信仰の傾向から独立した自分自身の意見を持てるように望んだ。彼女自身、他の人の既成の意見を受け入れるのを拒絶し、事実を見

24 *Cousin Phillis*: 変革する女性の運命

出すことの重要さを訴え、独立した意見を形成できるまで、判断しないように印象付けたかった。ギaskellは、

This is one reason why so many people dislike that women should meddle with politics; they say that it is a subject requiring long patient study of many branches of science; and a logical training which few women have had.—that women are apt to take up a thing without being even able to state their reasons clearly, and yet on that insufficient knowledge they take a more violent and bigoted stand than thoughtful men dare to do. Have as many and as large and varied interests as you can; but do not again give a decided opinion a subject on which you can at present know nothing. . . . (Rubenius119)

と長女にあてて手紙を書いている。

当時、妻の義務は子供を教育し、家事を切り盛りし、夫の精神的支えになる、夫は一家の長として立場を維持するという模範的關係で、それぞれが自分の責任を持つ労働の分担が 19 世紀の理想として表されたが、多くの家庭ではそれは不可能だった。妻や未婚の娘の稼ぎは不可欠であり、中流階級の女性が家の外で生活費を稼がなければならないのも明白な事実だった。ギaskellは、独身の娘が独立した生活や職業の訓練を正当に求めるのを認めようとしていた。そして明らかに、女性によい教育が必要であり、家の中でも外でも、何か働くことが女性にとって不可欠だと考えていた。ギaskellの作品中のヒロインたちは仕事を悪と考えていない。

この作品には、実はさらに続きの場面が用意されていた。その最後の場面とは、ホールマン氏が死んだ後、数年後に設定されている。ポールは結婚し、ホープ・ファームに戻ってみるとヒースブリッジにはチフスが蔓延している。フィリスがはじめじめした土地に排水設備を施すのに、ホールズワースの古い技術スケッチを使っている。フィリスは腕にみなし子を抱え、もう一人をガウンで覆っていたが、その子たちを養子にしたことを後でポールは知る。一般労働者と協力して働く独身の自立した女性は、男性の知識と女性の愛を結び付けている。このように回復して復活する、自立した女性の姿をギaskellは書こうとしていたのだが、出版スペースの制限で、ジョージ・スミスによって短くカットされることになったのである。しかし、最後のフィリスの

言葉、昔の穏やかな日々をとりもどせる、そうしてみせる、という強い意志は、危機的状況を乗り越え、そのような姿につながっていく女性を連想させる。

ユニテリアン牧師の妻としての義務を果たし、4人の娘の献身的な母であったギaskellは、小説家として、また自分の人生や友人たちの人生から、新たな問題に気づかされ、多くの点で作家活動に強い影響を及ぼされていた。あらゆる側面での女性の立場に関する問題は、彼女にとって重大なテーマであった。

4. 現代性

ホープ・ファームの生活は安定と静けさがあり、時がゆっくりと過ぎ、個々の瞬間が刻まれる様子が次のように描かれている。

The tranquil monotony of that hour made me feel as if I had lived for ever, and should live for ever, droning out paragraphs in that warm sunny room, with my two quiet hearers, and the curled-up pussy-cat sleeping on the hearthrug, and clock on the house-stairs perpetually clicking out the passage of the moments. (26)

田舎の生活は時間を超越し、感覚に直接働きかける浸透性がある。平和で美しい田園生活はまるで、イサクのところに連れてこられたリベカの物語のようであるが、ホープ・ファームの生活も、マンチェスターと同じようなエネルギーや実利的な思考が及び、進歩や苦しみから切り離された世界ではない。

ギaskellは最後の二作品『いとこフィリス』と『妻たちと娘たち』で、本質的に『克蘭フォード』の世界、18世紀の故郷の絵を正確に描こうと思っていたが、時が移り変わるとともに世界も変わり、彼女の想像はもっと後の時代の社会変化を捉えている。ナッツフォード自体が鉄道建設で変化し、子供時代の田舎とは隔たりがあることに十分気づいていた。この時代設定では、社会にテクノロジーや科学の世界が存在していることを伝え、鉄道時代の到来を感じさせている。

Linda K. Hughes が言うように、ポール・マニングは過渡期の人物で、田舎の生活からある程度分離されているが、ホールマン家との関わりによって田舎に属している。ポールは鉄道で働き、製鉄業の町バーミンガムの都会少

26 *Cousin Phillis*: 変革する女性の運命

年の目で田舎を見ている。鉄道は単に、新しいテクノロジーとして現代を具現しているのではなく、国内の連結の合理化システムの一部で、伝統や地方、国境さえも無視する新しい見方を要求するものとして存在する。鉄道エンジニアにとって土地は単なるデータや解決していくべき問題であり、変化しやすい現代のテーマである。また、その土地は、ホールズワースがイタリアの山麓からエルタムに、そしてホーンビーからカナダへと簡単に移っていくように、住んだり、働いたり、移動していく場所であり、ホールズワースのホープ・ファームへの到来と同じく、運輸システムによって、過去が薄れ、現代の色が伝わり国際化が助長されていくのである (*The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell* 96-97)。ポールは父に “all over wild myrtle and soft moss, and shaking ground over which we had to carry our line” (5) と話すが、柔らかい抵抗する土地に彼らの意思を押し付けることは、田舎への都市の侵略、科学やテクノロジーによって変化を及ぼす現代の侵略を表している。

また、ポールの父ジョン・マニングは新旧両方の特徴をもつ人物だ。彼は労働者階級の機械工として仕事を始めるが、機械に精通し発明の天才でもあったので、社会的立場を永久に変える製造会社のパートナーシップを申し出られる。ジョン・マニングを通してギaskellは、より古く単純な秩序は産業の進歩と共存できることを示している。Linda K. Hughes は、ポールの父について次のように述べている。

In *Cousin Phillis* Mr. Manning, Paul's father, signifies the rising importance in capitalist societies of a meritocracy built on talent, invention, and inductive knowledge all ranged in opposition to a priori judgments. Science in this sense promotes democracy, since scientists' interaction relies on exchanges of knowledge more than on social status: mobility, since innovation is rewarded with increased wealth and new career opportunities; and urbanization, since the pursuit science requires metropolitan centers where the like-minded can gather and build upon prior work. . . . (*The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell* 98)

ジョン・マニングは、知識と実力によって科学的革新をもたらし、現代社会の都市化に貢献し、能力主義的社会で出世する重要性を体現している。マニングがホールマンを訪ねたとき、マニングは熱心に牛の特徴を学び、ホール

マンは知的好奇心旺盛に機械や力学の説明を受けるが、農村と都市を代表する二人が、互いの仕事を理解しあう場面は、ホープ・ファームに現代性が浸透していくさまを喩えているようだ。

中産階級の特権と鋭い知性を持つホールズワースであるが、彼はこの新しく入り込んでくる現代的要素を具現しているといえる。世の中を進歩させ経済を活性化させる洗練された都会性は魅力であるが、出世第一主義の野心とともに、土地に根付かず流動的で、皮相的にかかわりしか持たないのである。Jenny Uglow が言うように、ギャスケルはこれを現代のリアリズムと捉え、どんなにホールズワースがフィリスを愛していようと、彼は新しい時代のアイネイアスであり、帝国の命令に従うために、海岸で悲嘆にくれるディドを置き去りにするであろう (Uglow 21)。つまり、フィリスが置き去りにされるのは単に人生の形であり、個人に関係のない仕事の利害から生じている現実にはすぎないのだ。彼が去った後、

Ever since that day of the thunderstorm there had been a new, sharp, discordant sound to me in her voice, a sort of jangle in her tone; and her restless eyes had no quietness in them; and her colour came and went, without a cause that I could find out. (85)

とあるように、フィリスは調子はずれな口調となり、不安そうな眼には落ち着きがなくなる。フィリスの恋愛を通し、現代性というものは成長や変革、大きな喜びをもたらすが、あらゆるものを破壊してしまうような脅威を含んでいること、また父のホールマン氏が ‘And yet you would have left us, left your home, left your father and your mother, and gone away with this stranger, wandering over the world.’ (100) と言ったとき、フィリスは精神的バランスを失い卒倒するが、これはフィリスを追い詰める厳しい叱責というだけでなく、ホープ・ファームが捨て去られ共同体の崩壊を招くことにつながる恐れを表わしたものだと言える。

5. おわりに

三つの点から考察したように、『いとこフィリス』は、もっとも牧歌的なクランフォードの世界において、近代化の波に押し寄せられ、大きな変化を

28 *Cousin Phillis*: 変革する女性の運命

受け入れる一方で生活体系の大きな揺らぎを感じながら、ヴィクトリア時代の女性という過去からの脱却や変革を遂げていく女性のストーリーである。しかしこれは単に女性だけに向けて描いたストーリーではなく、人生に立ち向かうギaskellの姿勢そのものでもあるといえる。

ギaskellは一人息子を亡くしたとき、悲嘆に暮れることは道徳的に間違っていると考えるようになった。1850年4月26日フォックス夫人に彼女は手紙を書いて

“I wish I were with him in that ‘light, where we shall all see light,’ for I am often sorely puzzled here but however I must not waste my strength or my time about the never ending sorrow; but which hallows this house. I think that is one evil of this bustling life that one has never time calmly and bravely to face a great grief, and to view it on every side as to bring the harmony out of it. (Chapple111)

と言っている。娘フィリスの苦しみを反映するかのよう苦悶する父ホールマンが、冷酷に困難な人生がどんなものかを認識する場面は、そのようなギaskellの思いが溢れている。今にも死にそうなフィリスが、途切れがちに讃美歌を呻くように歌う間、仲間の牧師がホールマンに精神的救いを提供しようと、信仰の世界で“an example of resignation” (104) を示すよう促し、“The Lord giveth and the Lord taketh away. The Lord giveth and the Lord taketh away. Blessed be the name of the Lord!” (104) という聖句を告げると、父は次のように答える。

There was a pause of expectancy. I verily believe the minister tried to feel it; but he could not. Heart of flesh was too strong. Heart of stone he had not.

‘I will say it to my God, when He gives me strength when the day comes,’ he spoke at last.

... ‘There are hopes yet,’ he said, as if to himself. ‘God has given me a great heart for hoping, and I will not look forward beyond the hour.’ Then turning more to them, and speaking louder, he added: ‘Brethren, God will strengthen me when the time comes, when such resignation as you speak of

is needed. Till then I cannot feel it; and what I do not feel I will not express, using words as if they were a charm.’ (104)

ホールマンはここで現実を理解した。フィリスを失うことを受け容れることなどできないということだ。諦めを示すことなどできない。諦めにふさわしい時は、人間にとって予定できるものではない。時を越えて見られるのは神であり、才能を与えられていない人間はできないとホールマンは考え、“There are hopes yet . . . God has given me a great heart for hoping” (104) と声を振り絞るのだった。仲間の牧師たちは、彼が農場や家畜を気にかけすぎ、学問に得意になり、神をおろそかにして、娘を偶像のように崇めた罪で、神が罰を与えているのだと責め苛んだが、ホールマンは “I hold with Christ that afflictions are not sent by God in wrath as penalties for sin.” (104) と断言した。本当の信仰とは、今置かれている状況から目をそらし別の場所に身を置いて安らぎを求めることを目的としたものではなく、現実を頑強に見つめ、他人や自分への務めを果たすことだと悟ったのである。苦しみと、彼本来の正直な感情から、人間愛の精神によって立ち立てられた、自分を支える信念が生まれたのである。そしてそれはまた、フィリスには罪のないことを認めることでもあった。Josie Billington は

“The hard thing is not giving up on life for the sake of something higher. Rather the greater achievement is to go on with it, return to it, keep turning back to it, re-living it again and again, only knowing more certainly what you do not know. Gaskell’s sense of experience always involved her being unsurprised by life’s surprises, taking things the second time round while still remaining alert and without complacency.” (108)

と述べているが、ギaskellは、不確かさ、苦悩と変化を通して人間性を維持できる価値が何かを、まさに問いかけているようである。召使のベティの短い説教に象徴されるように、

“we ha’ done a’ we can for you, and th’ doctors has done a’ they can for you, and I think the Lord has done a’ He can for you, and more than you deserve, too, if don’t do something for yourself. If I were you, I’d rise up and

30 *Cousin Phillis*: 変革する女性の運命

snuff the moon, sooner than break your father's and your mother's hearts
wi' watching and waiting till it pleases you to fight your own way back to
cheerfulness. (108)

今、フィリスは自分で困難を乗り越え、努力し、他の人のことを考えなければならぬのである。

ギaskellは時代の変化を敏感に捉え、新しいものの侵入を避けることができないこと、われわれは必然的に変化する状況に応じて変わっていかなければならないことを暗に示し、この作品では、人生の困難さを描くだけでなく、個人的または社会的変化を受け入れ、苦しみや不幸せに耐えうる経験と成熟を描こうとしたのではないだろうか。生命には鍛えられてこそ育まれる力が潜在しており、苦しみや不幸せに耐えることによって愛の価値が教えられるのだ、とわれわれは気づかされる。

*本稿は日本英語文化学会第113回例会において口頭発表した「*Cousin Phillis*: 変革する女性の運命」を加筆修正したものである。

引証資料

- Billington, Josie. *Faithful Realism Elizabeth Gaskell and Leo Tolstoy: A Comparative Study*. London: Lewisburg Buckwell University Press, 2002.
- Cooper, F. Suzanne. *The Victorian Woman*. London: V&A Publications, 2001.
- Gaskell, Elizabeth. *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol.7. New York: AMS Press, 1972. 1-109.
- . *The Letters of Mrs Gaskell*. Ed. Chapple, J. and Pollard Arthur. Manchester: Mando-
lin, 1997.
- Hughes, K. Linda. *Victorian Publishing and Mrs. Gaskell's Work*. Charlottesville: Univer-
sity Press of Virginia, 1999.
- Matus, L. Jill Ed. *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Cambridge: Cam-
bridge University Press, 2007.
- Pollard, Arthur. *Mrs. Gaskell Novelist & Biographer*. Massachusetts: Harvard University
Press, 1965.
- Rubenius, Aina. *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works*. Sweden: Upsala
A.-B. Lundequistska Bokhandeln, 1950.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell*. London: faber and faber, 1993.
- Wright, Edgar. *Mrs. Gaskell The Basis for Reassessment*. London: Oxford University
Press, 1965.

Synopsis

The Changing Woman in Elizabeth Gaskell's *Cousin Phillis*

ASAKAWA Maki

In this study, I argue that *Cousin Phillis* portrays changes in Victorian women in three aspects: growth through feelings, changes in social position and modernity. The story of Phillis Holman is her own trajectory of growth. She arrives at self-awareness through her romance with Holdsworth. Phillis falls in love with Holdsworth, breaks down upon hearing of his marriage in Canada, and slowly returns to health. Victorian women's lives were defined by fathers, lovers, and husbands. Phillis's father, the minister-farmer Holman, is a typical Victorian male who believes that a good woman's sexuality does not exist until awakened, and sees his daughter as his possession, not an individual in her own right. But at the time of his daughter's dangerous illness, Holman, who also has human emotion and tenderness, is filled with anxiety about his sick daughter and affirms her guiltlessness. Phillis experiences many hardships and changes in spirit, developing an independent mind. This story is basically a pastoral, and the quiet life portrayed in it reminds us of *Cranford*. In *Cousin Phillis*, Gaskell traced the remembrance of her youth in Knutsford, revisiting the roots of her beliefs. She was also aware of the increasing distance between contemporary life and her rural childhood. Knutsford was changing with the building of the railway. Modernity encroached on the rural community, and science and technology brought about a change in social and gender relations. There was no avoiding this invasion of the new, that is, the city's impingement upon the country. Gaskell tells us we should accept individual and social changes, look stoutly into this world and endure the pain with great courage, not give up when facing difficulties. These points all indicate changing aspects of the role of women in Victorian society.